

これが最後の恋だから

プロローグ

「あんだなんて、大っ嫌い」

辛いのは私の方なのに、どうしてあんだがそんなに辛そうな顔をするの。

怒りが収まらない。裏切られた、騙だまされた、傷つけられた——ありとあらゆる感情が体の内側から湧わき上がる。今目の前で起きている光景が、とても現実とは思えなかった。

それは悪夢を見て飛び起きた朝の気分にも似ている。けれど同時に、決定的に違うということも恵里菜えりなには分かってしまった。

自分は失ったのだ。誰よりも大切で大好きだった人を、今この瞬間失った。

「……エリ」

「うるさい」

「エリ」

「……っ！ やめてよ、もう！」

嫌いになったのなら、そんな風に優しく呼ばないで。そうでなければ期待しそうになる。

絶対に許せないのに、もう一度その顔で、その声で「好きだ」と言われたら、ほっとしてしまう

から。

「別れよう。……お前のことなんか、本当は好きでもなんでもなかった。幼馴染だから付き合ってみただけだ」

これだけならまだ許せたのかもしれない。幼馴染でなければ、この男と話す機会さえなかっただろうことは十分分かっていて、でも。

「佐保が、好きだ」

それを聞いた瞬間、頭の中で何かが弾けた。

佐保。それは大嫌いな姉の名前だ。

「……最低」

この男は初めから、恵里菜のことなど好きではなかった。彼が見ていたのも、欲していたのも恵里菜ではなく佐保。——自分は姉の代わりだったのだ。

「もう、いい」

疲れた。もう、何もかもがどうでも良かった。

大好きだった。高校生の拙い恋愛かもしれないけれど、恵里菜は全力で兎に恋をした。

でも、もう知らない。こんな男——もう、いらぬ。

「ばいばい、兎」

最後に彼がどんな表情をしていたか恵里菜には分からない。涙で滲んだ視界には、その場に立ち尽くす兎の影しか映らなかつたから。

——十八歳の冬、恵里菜の最初で最後の恋は終わった。

1

忙しい。目が回る。

店内に鳴り響く電話のコールが三回目を超えたが、誰も取らない。急ぎの稟議書を仕上げていた恵里菜は心の中で舌打ちをして、仕方なく受話器を取った。

「大変お待たせいたしました、平庄銀行上坂支店、新名でございます。はい、口座の残高でございますね。かしこまりました。それではお口座番号とご登録のお電話番号をお願いいたします。——ありがとうございます。それではお調べして、こちらからお電話させていただきます。……失礼いたします」

受話器を置いた瞬間に、すかさず次の電話がかかってきた。隣でのんびりとあくびをする後輩に、視線で「早く出て！」と伝えて、自分はすぐパソコンに向かう。もの十数秒で依頼された残高を調べ終え、折り返しの電話をかけた。

九月の銀行は、忙しい。

月末であることに加えて決算期だ。窓口には普段の倍近いお客様が来店するため、預金係はてんでこまい。それに比べれば少ないものの、恵里菜の担当である融資窓口にも、お客様が途切れるこ

となく訪れている。とてもではないが人手が足らなかつた。

(これじゃ休憩もろくに取れないじゃない！)

お昼休憩の時間はとうに過ぎ、昼食抜きは確定だ。ほんの十分でいいから一息つきたいけれど、この現状ではその時間すら惜しかった。

「いらつしやいませー！」

大きな声で挨拶をした後、眉間に寄りかけた皺を慌てて消して、恵里菜は自分の席へと戻る。

融資の案件を申請する書類である稟議書を仕上げると、すぐさまパソコンに戻って作業を進めた。今日の融資は普段の月末に比べてだいぶ多い。それ自体はありがたいことだけれど、さすがに忙しすぎる。だが、全てはお客様第一。お客様あつての銀行業務だ。

「新名さん、一番に折り返しのお電話が入ってます」

「今出ます！」

「書類が見当たらないんですけど……」

「そのキャビネットの一番上のクリアファイルに入っています」

(この時期は忙しいんだから、前日にできる準備はやっておくようにと言ったでしょう！)

注意する時間も惜しんでひたすら笑顔と謝罪、両手はパソコンと、体中を使って動きまわる。

気付いた時にはもう十五時、店のシャッターが降りるのを見て、恵里菜はこの日初めてほっとすることができた。

(……疲れた)

月末と決算期。しかし体が重く沈むようなこの疲れの原因は、それだけではない。

(なんで、今更あんな夢を見るのよ)

ここ数年、ふとした時に思い出すことはあつても、夢に見ることはなかつた。

それなのに昨夜の夢は、まるで当時を目の前で繰り返しているかのように鮮明だつた。晁の聲がはつきりと耳に残っている。今日はそれらを振り払おうと仕事に没頭したものだから、区切りがついた今では、この場に倒れ込んで眠ってしまうほどの疲労を覚えている。

だが当然、そんなことができるはずもなく。

九時に開店し、十五時に閉店する銀行業務は世間一般に暇だと思われているが、とんでもない。

窓口が閉まりお客様を待たせるプレッシャーからは解放されるものの、ここからがある意味本番だ。

書類を整理し、稟議書を仕上げ、督促と営業の電話をかけて……。やることをあげたらキリがない。

(今夜は絶対に飲んで帰ろう。飲まなきゃやってられないわ)

仕事終わりの一杯だけを楽しみに、恵里菜は残りの業務を片付け始めたのだつた。

新名恵里菜。

都内の大学を卒業後、地元の銀行に就職した彼女は、社会人四年目の二十六歳だ。

預金業務を一年経験したのち融資係に配属されてからは、主に後方事務を担当していた。他にも延滞督促の電話、稟議書作成などの事務全般と、時おり営業にも行くことがある。

百七十七センチと女性にしては高めの身長、落ち着いた物腰とは裏腹に、社内規定ぎりぎりの明る

さに染めた茶色の巻き髪。

仕事では頼りにされており、後輩への指示も的確だが、物言いがはっきりしているため怖がる人は数知れず。また、プライベートの気配を一切感じさせない独特の雰囲気がある。お客様への笑顔は常に絶やさないが、仕事以外の笑顔を見た者は、ほとんどいない。

——以上が職場における恵里菜の基本プロフィールだ。

「『新名さんって美人だけど怖いよね。確かに仕事の指示は的確だけど、言い方きついよ。見下されているみたいな気になるし。それに、私服が派手だと思わない?』」

低い男声でいかにも「女子」な口調で話されると、ぞくつとする。店に入るなり注文した生中を一気に飲み干した恵里菜は、ジョッキを卓に置き、対面に座る男をじろりと睨んだ。

「佐々原さん、気持ち悪いです。お酒がまずくなるのでやめて下さい。——あ、すみません。生中もう一つお願いします」

「気持ち悪いって酷いな。あーあ、入社した時のエリーは派手でも可愛かったのに。こんなコギャルが銀行員って冗談だろって思ったの、今でも覚えてる」

「コギャルはもう死語ですってば。あと何回も言っていますけど、私の名前は『恵里菜』です、勝手に短くしないで下さい。ついでに名前でも呼ばないで下さい、セクハラです」

「何言ってるんだ、こんなのセクハラのうちに入らないよ。大体、俺と付き合えて何度言っても聞きやしないくせに」

「飲むたびに『俺と付き合え』って言うのは十分セクハラに該当すると思いますけど」

「結構本気なのになあ」

「はいはい、ありがとうございます」

二杯目を終えてようやくエンジンがかかってきた恵里菜は、ふう、と一息ついた。

佐々原も残りのビールを美味しそうに飲み干し、空になったジョッキを置くと、ふっと笑う。

「それじゃあ改めて。上半期おつかれさん」

佐々原拓馬。二十九歳。三年先輩である彼は、恵里菜の元指導係だ。

平庄銀行では、新人育成カリキュラムの一環として、先輩社員がつきつきりで指導する。マンツーマン形式のそれは相性が悪ければ最悪だが、恵里菜の場合は運が良かった。

佐々原は恐ろしく仕事のできる男だったのだ。業務が終われば下らない軽口の一つも叩くが、営業成績は支店ナンバーワンで、顧客からの支持率もずば抜けている。怒り心頭でクレームを入れてきたお客様が、怒っていたのが嘘だったかのように笑顔で帰っていくほどだった。

人懐っこい笑顔に明るく朗らかな性格と、人に愛される要素が形になったような男だ。

しかし、仕事に対しては誰よりも厳しく、入社当時の恵里菜は彼に相当泣かされた。

新人の時はその指導の厳しさに何度も仕事を辞めたいと思ったものだが、四年目の今となってはただただ感謝するばかりである。指導係を離れた今も、こうして飲みを誘う程度には可愛がつくれているのだから、なおのことだ。

「あ、その馬刺し食べないなら下さい」

「いつも思うんだけど、そのほっそい体のどこに入るの？ ……ああ、胸か」

視線が一点に集中したことに気付くも、恵里菜は無視した。今日は胸元がざっくりあいたピンクのカットソーに白のジャケットを羽織り、白のフレアスカートを着ている。先ほどから佐々原以外の男性客の視線もこちらを向いているような気がするけれど、恵里菜は構わず酒を呷った。

細身な体にEカップの恵里菜の容姿はどうにも男を「そそる」らしいが、そんなの知ったことか。（それより今はお酒。これを楽しみに月末を乗り切ったんだから）

美味しいお酒と美味しい料理。一見チャラ男だが頼れる先輩。ここまで揃っているのに楽しまな

いなんてもったいない。
「さっきの声真似、三好さんですよね？ 私を嫌うのは勝手だけど、怖がる暇があるなら最低限の仕事くらいしてほしいですよ。月末は忙しいと言っておいたのに準備はしない、電話も出ない。それで愚痴ばかりなんて、どうかと思うけど」

「確かになあ。三好ちゃん、もう二年目になるのに学生気分抜けてないもんな」

「私だってまだ四年目だし、人のことどうこう言える立場じゃないですけど。お給料もらっている以上プロなんだから、仕事中に泣きごとを言うのはやめてほしいです」

百五十センチ前後の小柄な体と、真っ黒ストレートのبوبカット。どこか垢抜けない見た目に自信無さげなたどしい話し方。初めて会った時から恵里菜は三好のことが苦手だった。

田舎っぼさの残る彼女は、昔の誰かを嫌でも思い出させる。

「だいたい、私の私服が派手なのと、仕事の出来は関係ないじゃない」

「あんな、エリー」

三好への愚痴が止まらなくなりそうな恵里菜を、落ち着いた声がそっとたしなめた。

「三好ちゃんの態度は確かに褒められたもんじゃない。ましてや誰の目があるか分からない倉庫で悪口を言うなんてとんでもない話だ。でも、もつとコミュニケーションは取った方がいいんじゃないか？ 無理に個人的な繋がりを持ってとは言わないけれど、どんなに相性が悪くても同じ仕事をする仲間だ。もう少し愛想良くすることも大事だよ」

「愛想、ですか」

「そう。せっかく綺麗な顔をしているんだから、笑えばお得なことたくさんあると思わない？」

「そう……できれば、いいのかもしれないね」

さらりと容姿を褒められたことは素直に嬉しい。けれど、自分が佐々原のように人当たりが良く

接客では笑顔を絶やささない一方で、仕事仲間に対しては比較的ドライな自覚はある。しかし、やるべき仕事はこなしているし、それで特に問題もない——と思っていたが違ったらしい。

（見下してなんかいないのに）

三好の話を聞いて、怒るよりも呆れた。そして少しだけ、痛かった。

楽しかったはずの気分がだんだんと下降していくのを感じる。

恵里菜には佐々原という頼れる指導係がいた。だが三好の指導係は頼りない自分で、二人の関係も良好とは言えない。そう考えると、もしかしたら一番の被害者は三好なのかもしれない。

「まあ、三好ちゃんも決して悪い子じゃないんだよな。お客さんにも会社の人間にも、いつもここにこしてるし、あれはすごくいいと思うけど」

三好はいつも笑顔を絶やささない。見た目は地味だが、人当たりの良さは昔の誰かとは——「彼女」に比べられた過去に怯え、今なお虚勢を張り続ける誰かとはえらい違いだ。

(……だめだなあ)

後輩の些細な愚痴など笑って聞き流さなきゃダメなのに。表面上は気にしていないふりをしているでも、こうしてうじうじ考えてしまう。こんな恵里菜の一面を、三好はきつと知らないだろう。

キツくて怖い恵里菜がこんなにもマイナス思考で、人の目を気にする性格だなんて。

直したいと思うのに、昔からしみついたそのクセはなかなか直らない。

(なんか、嫌だな。……気分良く飲みたいのに)

今日はなんだかとても酔いが早い。仕事の疲れが溜まっていたのもあるだろう。けれどそれ以上の原因があることを恵里菜は自覚していた。

日中は忙しいから忘れていられた。しかしこうして上半期一忙しい日が終わり、気心の知れた先輩とのんびりしていると、無意識のうちにあの感覚が蘇る。

——エリ。

時間と共に記憶は薄れていく。薄れていかなくはならないと思っていた。

それなのに久しぶりに蘇った声は、どれだけ忘れようとしても耳にこびりついて離れない。

『エリが好きだ。——俺と、付き合ってほしい』

『エリはエリだろ?』

『佐保でも他の誰でもない。俺が好きなのは、エリだから』

知らない。無愛想でぶつきらぼうで——笑うと少し幼くなる、あんな男。

知らない。真面目なだけが取り柄で、可愛げも面白みもない、田舎臭い昔の自分なんて。

『佐保が、好きだ』

(……どうして、今更夢になんて出てくるの)

消したいのに消えてくれない声を追い払うように、恵里菜は冷酒をぐつと飲み干した。

「うっわ、なんでいきなり一気飲みしてんだよ!」

さすがに冷酒一気飲みは頭に来る。恵里菜はたまらず卓に突つ伏した。両手の上に頭を乗せてうつぶせになると、体中にじんわりと酔いが回っていく感覚がする。

「こら、エリー。だらしな過ぎ」

起きろよ、と促され、恵里菜は軽く身をよじって視線だけを佐々原に向ける。苦笑交じりに杯を傾ける先輩に、恵里菜の口からは自然と言葉が零れた。

「……佐々原さんの愛想のよさ、半分欲しい」

酔いで上気した桃色の頬に、どこかとしたアーモンド型の瞳。首筋から胸元にかけては赤みが差し、卓に頭を乗せているため、つぶされた胸の大きさが強調されている。普段はどちらかというつぶつきらぼうな後輩の乱れた姿を見て、佐々原は冷えたおしぼりを恵里菜の顔に押し付けた。

「冷たっ! なにするんですか、もう」

「うるさい。ほんつとにタチが悪い。甘えたいなら彼氏に甘えろ、酔っぱらい」

「……彼氏なんていりません。いても邪魔なだけだし、いいことなんてないですから」

それを酔っぱらいの戯言ざれごとと取ったのか、佐々原は「寂しいことを言うなよ」と苦笑する。

寂しいこと。佐々原の言うとおり、二十六歳独身女の言葉としては寂しすぎるだろう。でも本当に、恵里菜は彼氏なんていらぬのだ。

「彼氏がいたら、別れる時寂しいですよ。だから彼氏なんていらぬんです。いつ終わるか分からないような関係なんて、無駄なだけだから」

「今までどれだけ酷い恋愛してきたわけ？」

「聞きたいなら教えますけど、長いですよ」

「……なんで上から目線なんだよ。いいよ聞いてやるよ。だからだらしな性格でいるのはやめる。周りの皆さんに迷惑だ」

忠告を無視して、恵里菜はとろんとした目で佐々原を見つめる。いつも余裕綽々よゆうしやくしやくの彼がどこか慌てたような、気まずそうな表情をしているのが何とも面白かった。

(いい人だなあ)

爽やかな雰囲気も面倒見のいい性格も、仕事をしつかりこなす姿も全てが好ましい。

しかしそんな思いも、恵里菜が遠い昔、晃に感じた感情と違うことには間違いないかった。

「……私に双子の姉がいるって話したことありました？」

「いや、初耳」

なぜ佐々原に話そうと思ったのか。酔っていたから——確かにそうだ。しかしそれ以上に、やけになっていたのだと思う。誰かに話すことで、あれはもう過去の出来事なのだと自分で自分に知らしめたかったのかも知れない。

「私の姉は佐保っていうんですけど、とにかく可愛いんです。明るくて運動神経も抜群、出来損ないの妹にも嫌味なくらい優しい。一卵性いっらんせいの双子だから、顔だけは私とそっくりなんです」

「顔『だけ』？」

「はい。あとは全部正反対。妹は暗くて、冴さえなくて、運動ができてなくて、人と目が合わせられなくて……ね、全然違うでしょ？」

「……待ってくれ。今の話の流れだと、エリーがその暗い女の子だった、みたいに聞こえるけど」

「佐々原さんともあろう人が、何天然発言してるんです。その通りですよ」

「冗談だろ？ブランド物好きで、化粧品代は惜しまず、美容院も月に一回。欲しい洋服は迷わず購入。おまけに乗っている車は新車の外国車だったのにな。……よし。そんなエリーのどこが地味子ちゃんなのか言ってみな？俺は今まで、お前ほど黒髪が似合わない新人を見たことないけどな」

「ありがとうございます。それ、私にとっては最上級の褒め言葉です」

「……はあ？」

今度こそ訳わけが分からないと頭を抱えた佐々原の姿に、恵里菜は思わず笑みを零こぼした。佐々原の反応が嬉しかったのだ。それこそが、彼の目に恵里菜が「そう」映っていないことの証拠だから。

恵里菜は、すうっと大きく息を吸い込んだ。

「似てない双子の姉妹と同一年の幼馴染の男の子。妹は幼馴染のことが好きでした。でも劣等感の塊である妹は話しかけることもできなくて、いつも二人のやりとりを羨ましく思っているだけです。でも高校三年生になって奇跡が起きました。唯一自信のあった勉強がきっかけで、幼馴染と付き合いになったのです。妹はとても幸せでした。でも卒業間際に驚愕の事実が発覚！ 彼は実は姉が好きで、妹を身代わりにしていただけだったのです。傷心の妹は今まで以上に自分が嫌いになって、『変わるぞ』と決意しました。予定していた大学ではなく、都内の大学に進学した妹は、バイト代の全てを服や美容につき込み、派手な銀行OLに変身したのでした。——はい、おしまい」

呆気に取られる佐々原に恵里菜はにこりと笑う。そのまま椅子の後ろにかけていたハンドバッグから財布を取り出して一万円札を卓に置くと、さっと立ち上がり頭を下げた。

「お疲れ様でした、佐々原さん」

「え……ちよつと待っててエリー、お金なんていらな——」

「月曜日から下半期、また頑張らましようね。今日は本当に楽しかったです。それではおやすみなさい、失礼します」

止める言葉もひらりとかわし、恵里菜は居酒屋を後にした。

「さむっ……」

店を出た途端、肌寒い風が体を撫でる。

明日からもう十月。猛暑だった今年は、九月中旬を過ぎても一向に暑さが和らかなかつたけれど、

こうして夜の風を浴びるとなんとなく秋の気配を感じた。

一人暮らしの恵里菜のアパートは、居酒屋のある駅から歩いて五分ほどの場所にある。

周囲全てが田園地帯といった、絵に描いたような田舎でこそないものの、就職のために都心から戻ってきた当初は、やはり不便に感じたものだ。

(でも、ずっと帰ってきたかった)

便利な生活も可愛らしく洗練されたお店の数々も、嫌いではないけれど、どこか疲れた。

せっかくなこここまで変わったのだ。元の地味子に戻りたいなんて絶対に思わないが、自分の収入に見合わない服も車も化粧品も、今となってはもはや見栄に近い。

晃との思い出が詰まった街にいるのが嫌で、半ば逃げるように家を飛び出した。けれど、結局四年間が限界で、こうして戻ってきてしまった。それでも実家に戻るのとはなんとなく気が向かず、安い給料をやりくりして一人暮らしをしている。

(私、何がしたいんだろ)

大学卒業後からがむしやらに働いて、気がつけば、あつという間に四年間が過ぎていた。

仕事にも大分慣れ、心や私生活に余裕が出てきたせいでどうか。時々、無性に寂しくなる。

高校まで勉強一筋だった恵里菜にとって、気心の知れた友人など片手で足りる。その友人たちも高校卒業と同時に各地に散ってしまい、地元に戻ってきたのは恵里菜だけだ。

(だめだ、とりあえず帰ったらすぐ寝よう)

顔を洗ってシャワーを浴びて、さっさと寝る。明日は休日だ。悩むのは別に今でなくてもいい。

それから数分、アパートはもう目前というところで、バッグの中のスマートフォンが振動した。
「……佐保？」

名前を見た瞬間、心臓がドクンと鳴った。

宮野佐保。二十二歳の時、四年間の交際を実らせて隣県に嫁いでいった姉の名前がそこにある。

どう頑張っても敵わない大嫌いな人。美人で、華やかで、裏表がなくて、自信に満ち溢れている——
全てが恵里菜と正反対の、双子の姉。一卵性にも拘わらず、二人が似ているのは顔だけだ。

生まれてからずっと、恵里菜は佐保の影だった。趣味は読書、運動は苦手、人と話すのはもっと苦手。そんな妹が姉より唯一優れていた点といえば、勉強ができることくらい。

(なんでこんな時間に?)

時刻は既に零時三十分。人に電話をするには遅すぎる時間帯だ。

出るか出ないか悩んでいる間に着信音は止んだ。画面から名前が消えた瞬間、無意識にため息が漏れる。佐保とはもう一年以上会っていない。

名前を見ただけでこんなに動揺してしまう今、電話越しとはいえ、とても話す気にはなれない。

明日メールすればいい。しかし何気なく着信履歴を見た恵里菜は、今度は別の意味でひやりとした。

「……何、これ」

佐保からの着信の他に、知らない携帯番号の履歴がびつしり残っていたのだ。

姉の最初の着信は二十時半、ちょうど佐々原と飲み始めた時間帯だ。その後を追うように見知らぬ番号が並んでいる。見れば留守電も入っていた。さすがにこれは気味が悪い。

もしかしたら両親に何かあって、病院がかけてきたのだろうか？ それとも佐保の家族に何か？

恐る恐る留守電を再生しようと指を滑らせたのと同時に、再度佐保からの着信が入る。咄嗟に通

話ボタンを押してしまったが仕方ない、恵里菜は嫌々ながらスマートフォンを耳に当てた。

「……もしもし？」

『あ、エリちゃん？ やつと繋がった！』

高く澄んだ声が、酔った頭にダイレクトに響いた。

「……会社の先輩と飲んでたから気が付かなかった、ごめん」

『ううん、私こそ何回もごめんね。それよりエリちゃん、今どこにいるの？』

『どこって、これからアパートに帰るところだけだ』

『こんな時間に？ 危ないじゃない、女の子が遅くに一人で夜道を歩いちゃだめだよ！』

『もうアパートの前だから大丈夫だよ。——それより、何の用？』

早く切り上げようと恵里菜はわざと低い声を心がける。どこか焦ったような姉の声に違和感を覚えながらも、心の中では早く電話を切りたくて仕方なかった。

「急ぎの用事じゃないなら切ってもいいかな。仕事終わりで疲れているの。大分酔ってるし、すぐに帰って寝たいんだ。……悪いけど、佐保の大声は頭に響いて痛い」

なんて嫌な妹だろう。自分で言っていて気が滅入る。佐保を前にするといつもこうだ。

双子の母親でもある姉は子育てをしながら夫の両親と同居している。佐保のことだ、彼らにも大切にされているだろう。恵里菜にはとても真似できない。

『うん、疲れてる時にごめんね』

だから、嫌い。恵里菜がどんなに冷たいことを言っても、優しい姉は絶対に怒ったりせず、笑顔で跳ね返してしまうのだ。

『でもエリちゃんにどうしても伝えなきゃいけないことがあって！ エリちゃん、最近身の回りで変わったことはない？ 変な人とか、危ないこととかなかった？』

「……何、それ。特にないけど」

『本当？ ああ、良かった！ 昼間お母さんにも電話したんだけど、お母さんったらもう、どうしてあんなこと……』

「お母さんに何かあったの？」

『え、ううん。元気そうだったよ？』

「じゃあ、何？」

要領を得ない話し方に、だんだんとイライラしてくる。

『エリちゃん、あのね、あ——』

ぷつり、と通話はそこで切れた。

「佐保？ ちょっと、佐保？」

——「あ」って何？

「……なんなの、あの子は！」

訳が分からない。いきなり電話をかけてきたと思えば、変わったことはないかだなんて。

すぐにもう一度佐保からの着信があったが、今度こそ恵里菜は無視して電源を落とした。

(ああもう、早く帰ろう)

一人暮らしのアパートがこんなに恋しいなんて初めてだ。

恵里菜は1DKのアパートを格安で借りている。来年の四月に取り壊すことが決まっているからこそこの低家賃なのだが、部屋は南向きで広さも十分、恵里菜が落ち着ける唯一の城だ。

(年明けには新しい家探さないと。……めんどくさいな)

疲れと酔いで体力の限界だった恵里菜は、早く寝たいという一心で階段を上ったが——上り終えた瞬間、足が止まった。

(……誰?)

部屋の前に黒いスーツを着た男が座り込んでいる。薄明かりのため顔は見えないが、恐ろしく足が長い。寝ているのか酔っているのか、右手で額を押さえてうずくまるその姿は異様だった。

日付も変わった深夜。大通りから一本奥に入ったアパート周辺に人気はない。

目の前の光景に恵里菜は混乱した。よりによってなぜ、自分の部屋の前にいるのだ。

どうしよう。とりあえず警察に通報する？

先ほどの佐保との会話が思い浮かんだ。姉はこのことを言っていたのだろうか？

とにかく、いったんここを離れよう。コンビニでも車の中でもいい、不審者がどこかに行ってしまうまで待たなければ。

状況が呑み込めないながらも物音を立てぬよう一歩後ろに下がった、その時だった。

「きゃっ！」

ヒールが滑すべって思いきりその場にひっくり返る。腰から上を強く打ち、一瞬目の前が真っ白になった。尋常じんじょうじゃない痛みだ。頭にも絶対こぶができている。痛い、最悪だ。

「……何やってんだよ。大丈夫か？」

「見てないで助けて……え？」

恵里菜は我に返った。気付かれないように動いていたのに、自分から転倒あひくした拳句、不審者に助けを求めてどうする。

慌あわてて立ち上がろうとするも痛みで体に力が入らない。

怖い。恥ずかしい。とにかくなんでもいいから立ち去さってほしい。

しかしそんな願いとは裏腹に、男はあろうことか恵里菜の体を抱き上げた。

「え……なに、やだ、下ろして！」

ふわりとした浮遊感と、頬に感じるスーツの感触に慌あわてて身をよじる。けれど、男の逞たくましい腕は長身の恵里菜の渾身こんしんの力を持ってしても、びくともしなかった。

「鍵、出して。部屋って一番奥だろ。この通り両手が塞ふさがってるから、エリが開けてくれないと中に入れない」

なぜ不審者を家に招かなければならないのだ。男の顔を睨にらみつけようとして何かが引つかかった。

（……待って、今この人、私のこと——）

「エリ」と。この男は確かに恵里菜をそう呼んだ。

どくん、と心臓が激しく鼓動する。冷えきっていた足先から指先まで勢い良く血が巡り始めるような錯覚さえ覚えた。「新名さん」でも「エリー」でも「エリちゃん」でもない。ただ一人だけ恵里菜をそう呼んだ——思い出すのが嫌で、あれ以来誰にも呼ばせなかった「エリ」という愛称。

「……あき、ら……？」

八年前に比べて随分と逞たくましくなった体。真っ黒な髪に、シルバーの眼鏡。あの頃では考えられない真面目な姿だけれど、眼鏡の奥から恵里菜を見下ろす視線の強さは何も変わらない。

最後に別れた時よりずっと——悔なげしくなるほど素敵な、「大人の男」。

——ああ。

だから会いたくなかった。こうなってしまうと心のどこかで思っていたから。

卒業後の彼がどんな道に進んだかを、本人にはもちろん、人に聞こうともしなかった、それなのに。八年ぶりに現れた幼馴染おきななじみは、呆気あっけ無く恵里菜の心を奪っていった。

2

「初めて会った時にね、分かったの」

姉の結婚前夜、「どうして結婚を決めたのか」と恵里菜は一度だけ尋ねたことがある。妹からの珍しい問いかけに、佐保は一瞬驚いた表情をしたあと小さく笑った。

「好きだとか、かっこいいなあとか思うより前に『この人だ!』って思ったの。直感……なのかな。よく分からないけど。まだ高校生だったのに、変だよな」

幸せの絶頂にある彼女の微笑みは、恵里菜も思わず見とれてしまいうくらいに素敵だった。花が綻ぶような笑顔というのはきつと、あの時の佐保のものを言うのだろう。

佐保は高校一年生の春に、後に夫となる人に出会った。恵里菜もよく知るその人が佐保にとつての「運命の人」ならば、きつと恵里菜にとつての「運命の人」は晃だったのだと思う。

それくらい、十八歳の幼い自分は真剣に恋をした。これから先も一人はずつと一緒にいる——そう信じて疑わないほど、恵里菜は晃を想っていたのだ。だからこそ振られた後、恵里菜は何度も考えた。もしも別れた直後に晃がよりを戻そうと言ってくれていたら。もし、あれは嘘だ、やり直そうと晃が言ってきたら。

それでも現実は何も変わらなくて、恵里菜は晃を失った現実には直面した。

——そんな相手が何の前触れもなく突然目の前に現れた。

「足、痛いんだろ。早く鍵出せって」

どうしてここにいるの。なんでそんな風に普通にいられるの。

「エリ?」

呼ばないで。私を見ないで、触らないで。

抱き上げられた状態のまま、恵里菜の中では泉のように言葉が湧いてくる。

しかしそれらを声に出すことはできなかった。代わりにぐつと奥歯を噛みしめて唇を引き結ぶ。

十代の頃ならばきつと泣き喚いた。でも恵里菜は、もう二十六歳の大人だ。学生の頃とは違う。かといって全てを水に流して受け止められるほど大人にもなりきれていない。今の自分にできるのは、ただ無理やり感情を押し込めることだけだ。

「……鍵、バッグの内側に入ってる。それより、早く下ろしてよ」

「だめだ、足捻ったんだろ」

晃は恵里菜を抱いたまま、落ちていたバッグから器用に鍵を取り出し、部屋の扉を開けた。

玄関に入ると真つ暗な部屋が二人を迎える。恵里菜は抱きかかえられた体勢で、電気のスイッチを押すと、頭上で「うわ……」と呟く声が聞こえた。

「……きつたねえ部屋」

「なっ……!」

反論しなかったけれど、改めて部屋を見ると何も言えなくなってしまう。

確かに「きつたねえ」部屋だった。ベッドには脱ぎっぱなしの服が乱雑に散らばっていて、小さな丸テーブルには漫画と小説が山積みになっている。台所のシンクには二日前に使った食器がそのまま置いてあるし、ゴミ箱にはコンビニ弁当の残骸が堂々と陣取っていた。

「……仕方ないでしょ。最近忙しくて、家事まで手が回らなかったの」

この一ヶ月は、本当に寝に帰るだけの生活だったのだ。貴重な休みも体力の回復に努めるだけで終わってしまった。

晃はそれに答えず、「上がるぞ」と革靴を脱ぐなり、ダイニングキッチンの椅子に恵里菜を下ろ

した。晃のぬくもりが離れたところで、ようやく恵里菜はほっと息を吐く。一方の晃はといえば、スーツの上着を丁寧に畳んで向かい側の椅子の背もたれにかけると、そこに座った。

まるで我が家のようにくつろぐその姿に、恵里菜は一瞬自分が家主であることを疑った。問答無用で叩きだしてしまえばいい。頭の隅では冷静な自分がそう訴えているのに、いざ実行しようとする、とても難しかった。

晃が目の前にいる。その現実には思考と行動がついていけない。

沈黙が二人の間に流れる。それはわずかな時間だったけれど、恐ろしく長く感じられた。恵里菜にできるのはただ、うつむいてテーブルを睨みつけることだけだ。そうでもしないとこの沈黙に耐えられない。そんな状態にも拘わらず、晃の視線がどこを向いているのか嫌でも分かった。

——見られている。

視線が、熱い。

「エリ」

びくん、と大げさなくらい肩が震えた。恐る恐る顔を上げれば、何かを探すように室内を見渡していた晃と目が合った。

「救急箱、どこ？」

晃の口から救急箱という単語。似合わない組み合わせに反射的にぼかんとしてしまう。

「救急箱なんて置いてないよ」

「ない？ 一人暮らしの女の家のなのには？」

信じられないと言わんばかりの言い草にかちんときた恵里菜は、テーブルの下でぐっと拳を握って晃を睨んだ。晃は、一人暮らしの女の家には救急箱があつて当然だと思つている。それはつまり、比較対象がいるということだ。

別れたあと晃が誰と付き合つていようと恵里菜には関係ない。それでも無意識に比較するような発言をした晃に……何よりそれを敏感に感じ取つてしまう自分に苛立った。

「——帰つて。つていうか、お願いだから今すぐ帰れ」

付き合つていた頃、晃に対して命令口調で話したことなんて一度もない。

晃もそれを覚えていたらしく、彼はあからさまに不機嫌な表情を見せた。

「……お前、口悪くなつてねえ？」

「そう？ 元彼に影響されたのかもね」

暗にあんたのせいだと言えば、晃の眉間に皺が寄る。

「……『元彼』？」

なまじ顔立ちが整っているだけにその様子はどこかすごみがあつて、恵里菜は情けなくも動揺した。こうして室内の灯りのもとで真正面から見ると、悔しいくらいに格好いい。

艶のある黒髪にシルバーの眼鏡をかけた姿は知的で、見た目だけなら八年前と真逆の雰囲気だ。

仕事終わりなのだろうか、ワイシャツの胸元を緩める姿に学生時代にはなかった色気が感じられた。だが恵里菜として負けていけない。

(どうして私が睨まれなきゃいけないの)

元彼と言った瞬間、晃はいつそう不機嫌になった。恵里菜と付き合っていた過去などなかったことにしたいのだろうか。

(そんなの、私だって同じだ)

好きにならなければ、付き合わなければ。今更そんなことを考えても仕方がないと理解しているのに、あの時ああしてあげればという思いは、いつまでたっても消えない。

何よりこんな再会は——いいや、再会自体望んでいなかったのだ。

「——この通り、私は口が悪いんです。きつとあなたのことも不快にさせるでしょうから、今すぐお引き取り下さい。あなたに驚かされたせいだけけど、転んだところを助けて下さってありがとうございます。ありがとうございました。さあどうぞ、お出口はあちらです！」

一気に言い切った恵里菜を晃は呆れたように眺める。

「少し落ち着けよ。俺はお前に用があつて来たんだから、帰るわけにいかない」

「残念ね。あなたに用があつても、私にはありません」

「敬語やめろ」

「赤の他人と敬語以外の何で話せて？」

二度と会いたくないと思っていた男。

それは恵里菜にとつて、もはや他人だ。たとえ、こうして相対している間も、痺れるような胸の痛みを感じていたとしても——自分たちの関係はもう、八年も前に終わっているのだから。

「なんで私の住所が分かったのか知らないけど、もしかして大量の不在着信もあなたですか？」

「仕方ないだろ。何回電話しても、お前出ないし」

「普通、知らない番号からの着信は取りません」

「——エリ」

有めるような静かな声に、一瞬胸が痛んだ。彼だけが呼んだその名前。なれなれしいと憤る一方で、懐かしさを覚える自分もいた。混同する二つの感情に、だんだんと息が詰まってくる。

「……誰に私の番号を聞いたの」

「おばさんに聞いた。佐保に電話しても、絶対教えない！ の一点張りだったからな」

ごく自然に呼ばれた「佐保」という響き。晃の声が幼馴染の名前を呼んだ。そんななんでもないことなのに、こんなにも気分が沈む。

「……エリ？」

そんな風に呼ばないで。私はもう、あの頃の私じゃない。

「——顔も見たくない、か。当然だよな」

自嘲めいたため息にも恵里菜は顔を上げなかった。

「悪かったな」

そう言つて晃は背広を手を立ち上げる。頑なな態度に呆れたのだろう。部屋から出ていくその後ろ姿を恵里菜が止めることはなかった。構わない、これで良かったのだ。

「なのに、なんで……」

こんなにも胸が痛いのだろう。

ほんの少し言葉を交わしただけの晃の姿が目には焼き付いて離れなかった。大人になった晃。突然現れて、心をかき乱して——そして、出ていった。

「……全部、夢ならいいのに」

だが、現実逃避をしたまままでいられるわけもなかった。電源を落としていたスマートフォンを起動させると、案の定佐保からの着信が入っている。遅い時間を承知の上で折り返すと、一コール待たずに『エリちゃん?』という眠そうな声が聞こえてきた。

『さつきはごめんね、充電が切れちゃって。でも、どうしても言わなきゃいけないことが——』

「佐保。……晃が来たよ」

電話の奥で佐保が息を呑むのが分かった。

『……あつくん、なんて言ってたの?』

「用事があったみたいだけど、聞かずに追い返した。佐保が電話してきたのってこのことだよな?」
『……うん。実は、この前いきなりエリちゃんの連絡先を教えてって、あつくんから電話が来て……私は教えなかつたんだけど、今日お母さんと話したら、教えちゃったって聞いたの。間に合わなくて、ごめんね』

「佐保が悪い訳じゃないから。……ねえ、佐保はどうして晃に私の連絡先を教えなかつたの?」

『……エリちゃん?』

戸惑う姉の声に、恵里菜は晃と別れた直後のことを思い出していた。

その日、涙で目を真っ赤にした妹を姉は大慌てで迎えた。晃と別れたことだけを伝えると、佐保はまるで自分が傷ついたように泣きそうな顔をした。

「別れたって……なん、で?」

「好きな人ができたらしいよ」

それが誰かなんて言わなくても分かるだろう。皮肉を込めて涙目で睨みつければ、佐保は玄関に立つ恵里菜を押しつけて家を出て行こうとした。

「……どこに行くの?」

「あつくんのごだよ! エリちゃんを泣かせるなんて、いくらあつくんでも許せない!」

「佐保は、晃から何も聞いてないの?」

「……エリちゃん? 聞いてないって、なんのこと?」

その答えに恵里菜は愕然とした。

お前は佐保の代わりだったのだと晃は言った。種明かしをするぐらいなのだから、てっきり本人に告白したものと思っていたが、どうやら違ったらしい。

(佐保が晃と付き合うことは、ありえない)

佐保にはもう心に決めた人がいる。それを知っていても晃は諦められなくて、だからこそ恵里菜を選んだのだろう。もしも佐保に想いを告げれば妹思いの彼女が傷つくことを晃は理解している。だから自分の恋心を隠し通したのだ。全ては、佐保を傷つけないために。

でも、佐保は晃の気持ちなんて知らないから、妹を傷つけた相手をきつと許さない。

晃にとつても佐保にとつても、いいことなんて何も無いのに。冷静な判断ができなくなるほど惹かれていたのだろう。

——ねえ、佐保。私は佐保の代わりだつたんだって。晃は佐保のことが好きだつたんだよ。

——どうして晃の気持ちを奪つたの、あんたなんか大嫌い。晃の気持ちを代弁するのも、佐保を問い詰めるのも簡単だ。でも恵里菜はそれをしなかった。

そして、これ以上傷つきたくなくて恵里菜は逃げた。

第一志望の地元の国立大ではなく、都内の大学を受験したのだ。

両親は都内進学を快く思っていなかったけれど、恵里菜の初めてと言ってもいいわがままに、戸惑いながらも承してくれた。結局、四年間の学費に加えて月数万の仕送りまでしてもらえたのだから、両親には本当に感謝している。

「晃に私のことは何も話さないで。もし教えたら、もうこの街には戻ってこない」

家族にそう口止めをしたから、晃は恵里菜が受験先を変えたなんて思いもしないだろう。

彼はきつとあの大学に合格する。でもそこに恵里菜はいない。

それについて晃がどう思うか、恵里菜には分からないが、彼が自分をどう思っているかなんて、もう知りたくもなかった。

恵里菜は逃げた。佐保やこの街。——そして、晃から。

『どうしてって……あつくんに「自分の居場所を教えないで」って言ったのはエリちゃんでしょう？』

そして今、優しい姉の答えは恵里菜の予想していた通りで思わず笑った。

(そうなったのは、誰のせい?)

卒業後、双子の間ではもちろん、新名家でも晃の話題はタブーになっていた。

『でも、あつくんいきなりどうしたんだろう?』

「どうしたんだろうって、晃が今何しているのか佐保は知ってるんでしょ?」

『こっちの大学を卒業したあと、一度は都内の企業に就職してみたんだよ。でも少し前に地元に戻ってきて、今はこっちで働いているみたい。私も高校卒業後は会ってないから、詳しくは知らないけど。ただ、颯太さんとあつくんがお年賀のやりとりをしてくるみたいで、住所は分かるよ。ええっと、年賀状は……どこに置いたかな』

「別に住所なんていいよ!」

『そう? もし、知りたかったらメールで送るから言ってね。——あ! ねえ、エリちゃん。今年の年末は実家に顔出すよね? もうしばらく会ってないし……私、エリちゃんに会いたいよ。ほら、紗里と彩里にも会ってほしいし……。ちよつと待ってね、ちようど二人とも起きちゃって。ほら、さーちゃん、あーちゃん。エリちゃんに「こんにちは」って』

電話越しに可愛らしい二つの笑い声が聞こえ、思わず頬が緩んだ。紗里と彩里。今年三歳になる可愛い双子の姪たちだ。実家に顔を出すと母親が必ず写真を見せてくるから成長ぶりは知っているが、やはり会って確かめたい。佐保に対する気持ちは別にして、幼い姪っ子のことは大好きだ。

「……分かった、帰るよ。先生にも久しぶりに挨拶したいし」

『——颯太さんに、会いたいの？』

なぜか佐保の声がワントーン下がった。

「え……会いたいっていうか、うん、久しぶりにお話はしたいよ。佐保にとっては旦那さんだけど、私にとってはお世話になった先生だもの」

宮野颯太。佐保の夫であり、高校時代の恵里菜の恩師だ。たまに会った時に共に交わす酒がとても楽しく、だからこそ聞いてみたのだけれど。

「何か都合が悪いの？」

『ううん、なんでもない！ そ、そっかお酒……うん、そうだよね。分かった、颯太さんにも伝えておくね。じゃあね、エリちゃん。年末に会えるの楽しみにしてるね』

口早にそう言って電話は切れた。途端にため息が漏れる。敬遠していた姉と会話したせいか、それとも新たに分かった事実故か、どちらとも言えない。

(……晃、都内で就職したんだ)

地元を離れながらもこうして戻ってきた恵里菜と、地元に残りその後出て行った晃。そんな彼も今ではこちらで働いている。

(だから、会いに来た?)

昔なじみの女を思い出したから？ それとも、他に何か理由があった？

晃が座っていた方をぼんやりと見る。すぐに呆れて帰るくらいなら初めから来ないでほしかった。

思い出したくなかったのに、どうして——

頭の中はもうぐちゃぐちゃだった。今はもう何も考えたくはない。眠って全てを忘れたい。

そうでなければ過去に意識を引きずられてしまう。

「……わけ分かんない」

ベッドに行く気すら起きず、ダイニングテーブルに突っ伏した、その時だった。

ガチャン、と玄関の扉が開く音がして、思わず顔を上げる。

——帰ったはずの晃が、そこにいた。

「なんで……っ！」

慌てて立ち上がろうとするも、捻った足首に痛みが走る。たまらず椅子に座り込むのと、晃が靴を脱ぎ捨てて駆け寄ってくるのは同時だった。

「足、痛むのか？」

「……帰ったんじゃないかったの」

啞然とする恵里菜の前に跪いた晃は、「これを買に行ってた」と床に置いたビニール袋から冷却シートを取り出した。そのまま恵里菜の足首に触れる。

「んっ」

ひんやりとした指先に触れられ、思わず声が漏れる。晃は一瞬指を引くと、どこか厳しい表情で恵里菜を見上げた。

「……変な声出すなよ」

「だって、いきなり触るから！」

「貼るだけだ。今も痛いんだろ、このままじゃ明日腫れるぞ」

誰のせいで、と言いかけた言葉は、「——俺のせいだよな、ごめん」という言葉を前に自然と消えてしまった。

深く謝られたからではない。形の良い薄い唇を引き結ぶその表情が、辛そうに見えたからだ。

「俺に触られるのは嫌だろうけど、少しだけ我慢してくれ。すぐに終わる。ハサミ、どこ？」

「キッチンにあるけど……ねえ、自分で貼れるから」

しかし晃は恵里菜の精いつぱいの反抗を無視して、手早く足首にシートを貼る。その後キッチンからハサミを持つてくると、袋から取り出した包帯を適当な長さに切って丁寧に巻き始めた。

「……大げさすぎるよ」

「こういうのは最初が肝心なんだよ。しっかり冷やしておいた方がいい」

過保護なくらいの手当てを受けながら、恵里菜は自分の目の前に跪く晃をそつと見下ろした。

（……なんで、こんなに無駄に格好いいのよ）

この顔立ちは反則だ。八年前から一気に「大人」になった晃に見上げられて、好き嫌い以前に、ただただ恥ずかしい。不可抗力だと分かりつつも照れてしまう自分にうんざりする。

そういえば晃は変な所で小うるさかった。運動が苦手な恵里菜は体育の授業でよく怪我をしたが、校庭で転んで膝をすりむいた時なんて、嫌がる恵里菜を無理やり抱えて保健室に連れて行ったものだ。

「これで大丈夫だと思うけど、長引きそうなら病院に行けよ」

「うん。……ありがとう」

言いたいことは山ほどあるが、ありすぎて言葉にならない。とりあえず手当てしてくれたことに素直に礼を言うと、晃は大げさなくらい目を大きく見開いた。

「何、その顔」

「……いや、礼を言われるとは思わなかった」

「変なところで驚くんだね。——それで、今更なんの用？」

突然押しかけてきた相手を無表情に見つめる。恵里菜から距離を取った晃は壁際に立つと、その視線を受け止めた。

「話がある」

「私に話すことなんてない、だから帰って。——そう言っても、無駄なんですよ」

「ああ、悪いけど、聞いてもらえるまでは帰らない」

「……あいかわらず、勝手だね」

晃は眉を寄せるだけで何も言い返そうとはしなかった。

（落ち着け）

深呼吸をして心を整える。手当てをする時わずかに足首に触れた晃の手、自分を見上げる瞳、今もなお自分にまつすぐ注がれる視線。その全てが恵里菜を戸惑わせる。

「その『話』っていうのは、深夜に一人暮らしの女性の部屋に押しかけなきやいけなくらい大切な話なの？ 佐保に聞いたよ。今はこつちで働いているらしいけど、金曜の夜に待ち伏せするなん

て随分暇な仕事なんだね」

何の仕事かも知らずわざと嫌味を言っているのに、晃は機嫌を損ねるところか驚いた様子だった。「佐保と最近会ってるのか？」

「一年以上会ってないけど」

「……そんなに？」

「お互いいい大人なんだし、別におかしい話じゃないですよ。さつき電話したの。佐保には家庭があるし、私だって仕事がある。それに、私が佐保に会おうと会うまいと晃に関係ない。ついでに言わせてもらえば、夜中にいきなり押しかけるなんて、社会人としてちよつと非常識なんじゃない」「事前に連絡したら逃げると思ったから、こうするしかなかったんだ」

「私が晃のことを歓迎するわけじゃないじゃない。ほんと、いい性格してる」

あえて強烈な皮肉を言った。怒ればいい、幻滅すればいい。声を荒らげるまではしなくても、恵里菜は晃が不機嫌になることを想定した。

しかし晃の顔を見て、戸惑わずにいられない。彼は怒るでもなくただ辛そうに——まるで傷ついたような表情を見せたのだ。

(なんで……?)

恵里菜がそうなるならまだ分かる。でもなぜ、晃がそんな顔をする？

「エリが俺に会いたくないのも、そうさせるだけのことをした自覚もある。何を言っても言い訳にしかないのは十分、分かってる」

「だったらなんで——」

「それでも会いたかった」

恵里菜は唇を噛みしめた。

(……何を、今更)

身勝手な言い分に、拳に力が入る。怒鳴ってやりたい、今すぐ帰れと追い出したい。我慢するのがやつとなほどの凶暴な感情を恵里菜は必死に抑え込んだ。

仕事上で理不尽な思いは数えきれないほど経験した。

働くとは自分を殺すこと。恵里菜は就職してそれを痛感した。もちろん一般的な考えではないだろうし、「自分」を活かして働いている人もたくさんいる。しかし恵里菜にとっては我慢の連続だった。髪を染めて、濃い化粧をして、身の丈に合わない車に乗って。

外見ばかり変えても中身が変わらなければ何の意味もないことは分かっている。それでも恵里菜にとつての化粧は武器で、鎧だ。地味で、根暗で、ずぼらな昔の「恵里菜」ではない。

時に生意気だ、冷たそうと陰口を叩かれながらも仕事はきっちり終わらせ、冷静さを心がける。もちろん、女性としての身だしなみも忘れない。それがこの八年間で恵里菜が身につけた「武器」だ。

——でも、晃にだけはそれが通用しない。

晃の一言に、心が荒れる。

「この八年間ずっと、エリに会いたかった。でも俺にそんなこと言う資格はないから、会いには行かなかった。……でもこの記事を見たら、いてもたってもいられなくなって、佐保だけじゃなく宮

野にも連絡を取った。結局教えてもらうことはできなくて、おばさんに頼み込んだんだけど」

晃は一枚のクリアファイルを背広の内ポケットから出してテーブルに置く。中には小さな紙切れが挟まっていた。

「これ、なんで……」

促されるままそれを手に取った恵里菜は言葉を失った。

『地域に根づいた営業を！』

切り抜かれた記事の中には、笑顔で接客する恵里菜がいた。

一ヶ月ほど前だろうか。地元の新聞社から「働く女性」をテーマに特集を組むので取材させてほしいとの依頼があった。それを受けた支店長は恵里菜を選んだ。地方紙とはいえ自分の顔が新聞に載ることにあまり気は進まなかったけれど、小さなスペースだというので、しぶしぶ了承したのだ。

この業界を選んだ理由、仕事のやりがい、プライベートの過ごし方。銀行OLの日常などに誰も興味なんて持たないだろうと思いつつも、恵里菜は当たりさわりのない受け答えをした。その後すぐに仕事が立て込み始めたから、今の今まで取材のことなどすっかり忘れていたのだけれど。(どうして晃がこれを持っているの?)

こちらで働いているならば、見る機会があってもおかしくはない。しかし汚さないためか、まるで大切な物のようにファイルに入れてあるのは、なぜ?

「驚いたよ。昔のエリとは全然違うけど……名前を見なくてもすぐにお前だって分かった」

綺麗に切り取られた記事。形のいい指がゆつくりと、写真の恵里菜に触れる。

「八年前、俺はエリを傷つけた。それについて言い訳はしない、本当に悪かったと思う。……でも、頼むから話を聞いてほしい。……あの時知らなかったことを今の俺は知っているから」

「……なに、それ。それを聞いたら何かが変わるの? あの時、晃が言ったことがなかったことになるの? ——違うでしょう!？」

冷静にならなければと思った。でも、これ以上はだめだ。冷静になんてなれない。

八年前、自分を手酷く裏切った男と、小さな地方新聞の一記事を大切に持つ男。

——ぶれる。恵里菜の中の晃が崩れる。

「……帰って」

「エリ、俺は——」

「お願い、晃。私の前から消えて」

晃は何も言わない。ただ黙って恵里菜を見つめる。晃はいつもそうだった。二人共、そう口数が多い方ではなかったけれど、恵里菜が話す時晃は恵里菜を穏やかに見つめ、時折ちゃちゃを入れてきた。そういう時の彼はとても優しい表情をしていて——恵里菜はそんな晃が大好きだった。見つめ合う二人。ここが高校の教室であるかのように錯覚してしまう。

「あんなことして、いきなり押しかけて、最低なことをしているのは分かっている。悪いとも思う。でも今を逃したらエリは二度と俺に会ってくれないだろう?」

「——そうしたの、晃じゃない!」

気持ち、溢れる。

「今更話ってなんなの、どうしたいの!? 私は二度と晃に会うつもりはなかった、これからだってそう! 会いたくないの、顔も見たくないの、お願いだから帰ってよ! 嫌なんだよ、晃が目の前にいるだけで痛い、辛いんだよ!」

「エリ」

「呼ばないで」

「……エリ」

「呼ばないでって言ってるでしょ!」

恵里菜はたまらずクリアファイルを投げつけた。これ以上は顔を見ているのも辛くて部屋に逃げ込もうとしたけれど、後ろに強く引き寄せられる。

広く深い胸からは、恵里菜と同じくらいに激しく鼓動する心臓の音が聞こえた。背後から抱きしめられているのだと分かった瞬間、恵里菜の頬に一筋の涙が流れる。

懐かしいこの体温。忘れたくても忘れられなかったぬくもりに、恵里菜の中で何かが崩れた。

——本当はずっと、こうしてほしかった。

背中を向ける恵里菜を引き留めて、抱きしめてほしかった。でもそれは、「今」ではない。

八年前。こうして、「嘘だ」と、本当に好きなのは恵里菜だとそう言っただけだった。

でも晃はそれをしなかった。欲しかった言葉を、ぬくもりを与えてはくれなかったのだ。

「エリ」

耳元に声が降ってくる。大好きだった声、大好きだったその呼び方。

「ごめん、エリ」

両手を恵里菜の腰に回してぎゅっと抱きしめながら、まるで許しを請うように晃は囁く。その瞬間、恵里菜の全身から力が抜けた。咄嗟に座り込みそうになる体が支えられる。けれど、晃に背中を向けた恵里菜はふるふると首を振って力なくそれを拒絶した。

「……帰って」

懇願にも似た弱々しい声に、晃の体が一瞬震える。

「お願いだから、一人にして」

涙を流しながらそう囁く恵里菜に、晃はゆっくりと体を放す。彼は床に座り込む恵里菜を切なげに見つめた後、小さく「悪かった」と言い離れていった。そしてテーブルの隅に置いてあるメモ帳に何かを書いて、恵里菜の前にそっと置く。

「二人で会おうのが嫌なら、おばさんが一緒でも、電話でもいい。……一度だけでいい、落ち着いて話したい」

恵里菜は答えない。ただうつむき、涙を堪える。

「ずっと、待ってるから」

最後にそう言っただけで帰っていった。静かに閉じられた扉、訪れる静寂。

「つ……晃の、ばか……」

恵里菜のすすり泣く声だけがその場に虚しく溶けて消えた。